

## 聖書盜難事件から得たもの

三上香子

これは、プロテスタント系の私立高校での実話です。ある日、教養科目「宗教」担当の先生が、「カバンを盗まれました！」と、息を切らしながら教室に入ってこられました。そして、「電車に乗って、網棚にカバンを置いて座席に座ったのですよ。ほら、この高校は終着駅でしょ。だからいつもカバンを棚に乗せて眠るのです。でも、駅についたらいいのですよ、カバンが！」と、悔しそうにこぶしを握って大声でおっしゃいました。私たちは、温厚な先生が額に汗をかき、今にもずりおちそうな眼鏡を抑えながら身振り手振りで被害を訴える様子がおかしくて、声を出して笑ってしまいました。

そのとき、誰かが「カバンの中身は何だったのですか？」と尋ねました。すると先生は、「聖書と讃美歌集、それに十字架です」と答えられました。それを受け別の誰かが「商売道具だ」とつぶやいた瞬間に、クラスは今まで以上に大きな笑い声が響きました。それを見て先生は、黙って教室から出ていかれてしまったので、その日の宗教の授業は自習になりました。私たちは気の毒な先生を思いやることもなく、自由な時間が与えられたことに歓喜しました。

あれから半世紀たちましたが、私にはずっと心に引っかかっていることがあります。それは、泥棒の心情と先生への謝罪の思いです。泥棒については、「盗んだカバンに聖書が入っているなんて、さぞ驚いただろう」ということと、自分には不要だと捨ててしまったのか、それとも中身を見て悔い改めたのか、ということです。どちらかを選ぶことで、泥棒のその後の人生は大きく変わることは言うまでもありません。そしていつしか、この出来事は、神様が泥棒に改心の機会を与えてくださったのではないかとも思うようになりました。

次に、先生への謝罪についてです。なぜあの時に笑ってしまったのだろうという後悔がのこっているのです。自分自身がこれまでの人生で、何度も大切なものを失った経験をしましたが、そのときにいつも壇上で笑われた先生のことが浮かんできました。先生の心情を考えるといったたまれなくなります。ほんとうに申し訳ないことをしました。

なお、事件の翌週から宗教の授業は平常通り開講されていました。とくに先生から事件についての話はなかったように思いますので、ひょっとしたらカバンが見つかったのかも知れませんし、新しく聖書を調達されたのかもしれません。今になれば確認のしようもありません。ただこの出来事は、今では還暦を過ぎた私のなかで永遠に消えない青春の贈り物として、一生涯消えることはありません。